

【発行】札幌市教育文化会館

アクト第23号

act

art,
culture,
tradition

23

July 2016

創り方の、造り方。

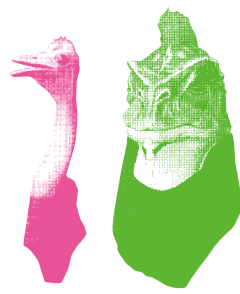
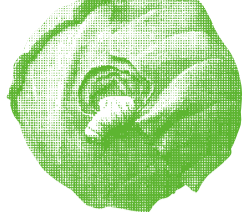


特殊造形師

時には15mをこえる龍をつくる。時には見た人が思わずおののくメイクを施す。時には空想上の生物を紙から組み立てる。文字通り、手さぐりでまだこの世に生まれていないものを生み出すその工程は、ファンタジーそのものかもしれない。決まりごとに囚われず、しかし地に足の着いた仕事をする。それが吉田流の特殊造形。







創り方の 造り方。

あるもの、ないもの、つくります。
そんな不思議な文句でも、この人ならできそうな気がする、
そんな風に思わせてくれる札幌の特殊造形師・吉田ひでおさんに
つくり方のアレコレを聞いてきました。

act
art, culture, tradition
23

ペラペラの紙から立体に。
吉田流 造形?分クッキング

エゾシカの角をつくってみよう!

特殊造形師・作品によってつくり方は様々ですが、
吉田さんお得意の「紙」からはじめるつくり方を教えてもらいました。

1 型紙を作る

まずは作りたい形(今回はエゾシカの角)を紙で立体に組み立てます。実物がある場合は参考にしながら、無い場合は想像しながら(!)、手を動かしながら作るそう。組み立てた紙を展開すれば、型紙に。



2 型紙を書き写す

厚さ数ミリのポリエチレンフォームに、型紙を書き写していきます。この素材、いわゆるお風呂マットなどにも使われているそうで、丈夫で軽く加工しやすく、よく使うのだそう。



3 切り取り

書き写した線にそってカッターで切っていく...だけではなく、なんと途中で包丁も登場。張り合わせる部分によって直角ではなく斜めに刃を入れて、厚さを調節するためだそう。まるでお刺身を切っているようでした。



5 本物そっくりな塗装をして完成!

ペラペラの紙、素材からあつという間に立体物に変身! リアルな色つけ・加工をすれば本物そっくりに。お見事です!

4 貼り合わせる

建築用のG-1という接着剤を切り口にハケで塗っていきます。塗りが乾いてから貼りあわせるという接着剤なので、失敗は許されません。

【インタビュー】 INTERVIEW

特殊メイクや特殊造形の分野において、
北海道の草分け的な存在の吉田ひでおさん。
工房にお邪魔してお話をうかがいました。

馬鹿馬鹿しいことほど、大真面目に。 ひとを驚かせるのが好きなんです。

なんでも屋なんです、基本的には。教育大の芸術科を出ていますが、作家ではないんですよ。わたしはアートを作るんじゃなく、商売として「もの」を作るんです。監督の頭の中にしかないものや、必要なのになかなか作れないもの。まだこの世に無いものを作る。よく受ける仕事は、美術スタッフさんが手に負えない、ヘアメイクさんがどうしたものかと困ったもの、そういった依頼が多いんです。いつ、どんな難題がやってくるかわからないという、ある意味リスクな仕事ですが、無理難題とぶつかる、あらゆる材料やアイデアで何とかしていく、そういうことを楽しんじゃうんです、わたしは。電話で依頼が来て、電話を切ってからさあどうしようと悩むという、そんなことの繰り返しです(笑)。

小さい頃は外で遊ぶより絵や工作の方が好きでした。生物や動物、人のからだや構造が好きで、医者になりたかったんです。でも、自分の頭じゃ無理だと(笑)。それで教育大の美術科に入りました。大学はすごく楽しかったんですけど、まわりを見ていて、自分は芸術よりの人間ではないなと気がついて。ただ、中学生

の時に触発された80年代のSFホラーや特殊メイクに興味があつてずっと真似事のようなことはしていたんです。縁あって東京で特殊メイクなどの活動をしている人の所に大学の休みごとに通って、その流れて映画「帝都物語」の衣装制作にも参加しました。そこからずっとノンジャンルで今の仕事を続けてきました。でも、どんな仕事であっても、むしろ馬鹿馬鹿しい仕事ほど、本気でやるのが大事だなと思います。馬鹿なことをふざけてやっても、まあ面白い。真剣にやらないと伝わらないんです。自分は作家ではないですけど、自分が作るとやっぱ個性が出てくるんです。だから特に作家性では売れ込まない。自然に自分らしさが出て、その上で相手の要求以上のものを作りたい。イベントの着ぐるみだったら観に来たお客さんを驚かせたいし、何より依頼してくれた人に最初に見せた時、驚かせたり大笑いさせたい。基本、人を驚かせるのが好きなんです。自分がされるのは嫌なんです(笑)。よく代表作は?と聞かれるんですが、特にありません。作っても作っても、満足しないんです。だから、最新作が代表作かもしれないですね。

PROFILE
吉田 ひでお
Hideo Yoshida

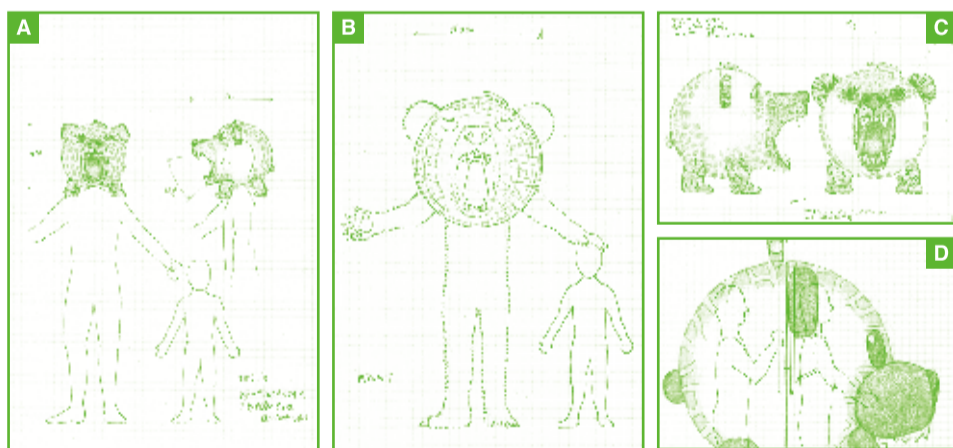
大学在学中に『帝都物語(1987)』に参加したのを皮切りに、札幌ローカルTVCM280本以上、広告映画演劇等の特殊美術、メイク、造形を手掛ける。夕張「メロン熊」やJR旭山動物園号「ハグハグチェア」、TEAM NACS特殊美術など作品多数。



設計図拝見!

〜リアル恐い着ぐるみ・メロン熊〜

吉田さん製作の着ぐるみの中でも注目度の高い夕張「メロン熊」。着ぐるみを作る際に吉田さんが描いたラフ図をちょっとだけ公開します。



A / 頭にかぶるだけのシンプルなタイプ。吉田さんメモでは、子どもの目線から遠くなることを心配しています。 B / 実際には作られた着ぐるみに近いタイプ。 C / 大人気だったマグネットを極力正確に拡大した案。 D / 中には2人入って動かすという仕組みも考えていました。

メロン熊とは?

クマガ農家のメロン畑を荒らし、メロンを食べ続けて変貌してしまった...そんなストーリーを持つ夕張のゆるキャラならぬ怖キャラ。夕張市内のお土産屋さんで考案されました。着ぐるみは様々なイベントに出没し、噛みつくパフォーマンスで人気を博す。

特殊造形って?

Q&A

Q1 やっぱ特別な機材でつくりますか?

A わりと身近なものが多いです。ほとんどはホームセンターで揃うかもしれません。道具本来の用途ではないかも、という使い方を考えて、作るのかけっこ好きなんです。

Q2

どんな人がこのお仕事に向いていますか?

A

手先の器用、不器用よりも
① 作ることが好きかどうか
② 柔らかい頭、軽い腰
③ 例えば1つのコンロで効率的に短時間で複数の料理を作る器用さ
こういったものの方が大事だと思います。

Q3

どんどん進化していくCG技術。どう思います?

A

やっぱり「手でさわれるもの」は無くならないと思いますよ。ゆるキャラとか、ぬいぐるみとか、今でも人気ですから。それから、CGであまりキレイに作られると、素通りされちゃう。画面の中の存在感として、実物じゃなきゃいけない時があるんじゃないでしょうか。

こんなものも、作っています。

クリーチャー・モンスターから非実在の生物や人体(ダミー)等、かわいいものから恐いもの、丈夫で使いやすいものまで、あるもの、ないもの、作ります。

■ 特殊美術・舞台美術

大道具・小道具、衣装・セットのエイジング(汚し塗装)・装飾など。

■ 特殊メイク

フォーム・ゼラチン・シリコン等で要望にお応え。

■ 特殊造形

あらゆる物を軽量で丈夫なPC工法をメインに製作。

■ 着ぐるみ・かぶり物

お手軽タイプから本格的なバルーンタイプも受注可能。



札幌市教育文化会館大ホールで上演された作品「オホーツク」(2015年3月)の巨大な魚の頭部リニューアルも担当。

【お問い合わせ】 **アーリオ工房** TEL.011-772-4819